

# 観光文化

Tourism & Culture

213

May 2012

## 特集◎東京スカイツリー®の 景観形成と観光資源としての考察

— 新たなシンボルとしての価値創造を多面的角度から探る

### ◆巻頭言

東京スカイツリーと観光振興 石原 慎太郎……①

### ◆特集

・「不思議さ」が魅力と美しさをつくる

— 東京スカイツリー デザインの発想の源 澄川 喜一……②

・都市景観的な視点から見た東京スカイツリー

— 東京の新たな塔による都市形成と観光資源としての可能性 岡本 哲志……⑦

・江東水路地帯と北十間川

— 水面から見上げた「水路の町」の魅力と東京スカイツリー 石坂 善久……⑪

・東京スカイツリーと下町文化の融合を探る

— 現代技術の粋が放つエネルギーを観光・地域活性化のパワーに変換する 阿部 貴明……⑯

◇研究ノート 三陸の観光復興

— 岩手県田野畑村の取り組み (5) 大隅 一志……⑳

### ◆連載

I あの町この町 第49回

共存共栄 — 京都府綾部市 池内 紀……㉔

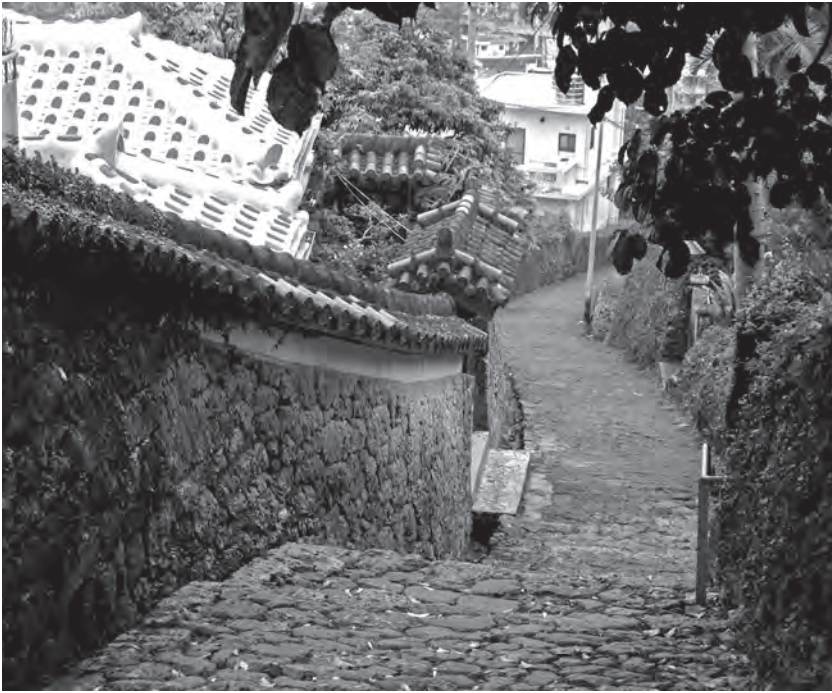
II ホスピタリティーの手触り 70

暮らすように旅する 山口 由美……㉓

### ◆当財団からのお知らせ

「公益財団法人」への移行に伴う今後の事業展開について……㉔

### ◆旅の図書館 移転のお知らせ



## 石畳・沖縄首里

琉球王朝は室町時代に成立し、約四百五十年間にわたり栄えたと伝えられる。その中心が首里城である。沖縄戦で焼失してしまったが、その後、遺構発掘が行われ、首里城が徐々に復元されている。二〇〇〇年にその首里城跡が、世界文化遺産に登録された。一般公開されると多くの旅人が訪れ昔日の想いにふける姿もまた素晴らしい。首里城に入るには守礼門をくぐるわけだが、赤瓦をあしらった上品な風情が目を引く。首里城の中心は正殿である。日本と中国の文化を取り入れ沖縄独自の建築様式を調和させた特徴を備えた沖縄最大の木造建築である。きらびやかな朱色は一層、正殿を浮き立たせている。さて、今回お伝えする石畳であるが、首里城と那覇を結んだ主要道路である。五百年前から存在したと地元住民が語るように、当時の面影を色濃く残す。石畳が敷かれた急峻な坂道は約三百メートルに及ぶ。沿道には赤瓦が往時のまま残り、印象的な光景がすがすがしい風景を醸し出す。

(写真・文 樋口健二)

東京スカイツリー®がいよいよ開業します。隅田川の水辺に立つ東京スカイツリーは、年間二千万人もの観光客を集めることが見込まれており、新たな東京の観光資源となるでしょう。

かつて、世界最大の百万人都市であった江戸は、社会学者のスーザン・ハンレーが「一八、九世紀」に生きたら、このまちに庶民として住みたい」と述べているように、大名屋敷や寺院の豊かな緑が広がるなか、瓦葺きの屋根と白壁によるモノトーンの街並みがつづく、美しい都市でした。隅田川を中心に、多くの川や運河が縦横に張り巡らされた「水の都」でもありました。

しかし、日本が戦後半世紀で成長する過程で、東京のまちは、効率を優先するあまり、美しく優雅な江戸のまちからはかけ離れた姿に変貌してしまつたのです。

東京都では、美しい江戸のまちを、水と緑の回廊で包まれた美しいまち東京として復活させるとともに、その多彩な魅力を発信し、国内外から多くの観光客を呼び込もうとしております。東京スカイツリーの開業を起爆剤として、こうした取り組みをより一層強化していきます。

具体的には、「水の都」江戸の象徴である隅田川の賑わい

## 東京スカイツリー®と観光振興

石原 慎太郎

東京都知事

を取り戻す「隅田川ルネサンス」を展開していきます。東京スカイツリーを望む水辺でのさまざまなイベントの開催やオープンカフェの設置、川風や緑の薫りを感じられるテラスやベンチの整備などを進めていきます。

また、東京スカイツリー周辺の観光案内板の設置や交通アクセスの整備、舟運を生かした観光ルートの開発などを進め、地域の賑わいを創出していきます。海外における観光プロモーションをはじめとするさまざまな機会を通じて、東京スカイツリーを新たな観光資源として紹介していきます。

折しも東京は、東日本大震災からの復興と再生をスポーツの力で成し遂げるため、二〇二〇年オリンピック・パラリンピック招致に名乗りを上げました。日本が立ち直つた姿を世界に披歴し、支援に対する感謝の気持ちを示すとともに、世界中から集まる多くの人たちに東京の魅力に触れてもらう絶好の機会となります。

東京スカイツリーの開業を、東京の魅力をさらに向上させ、活力と風格ある世界都市・東京を実現する契機とするとともに、二〇二〇年オリンピック・パラリンピック招致に向けた一歩ともしてまいります。

(いしはら しんたろう)

# 東京スカイツリー®の景観形成と観光資源としての考察

——新たなシンボルとしての価値創造を多面的角度から探る

今年五月二十二日に開業する、東京の新たなランドマークとして注目される東京スカイツリー。今号は、「景観形成と観光資源としての考察」と題して、デザイン、都市形成、水路のまちとの関係、下町文化との融合による観光振興などの視点から、新たなシンボルとしての価値を探ります。

「不思議さ」が魅力と美しさをつくる

——東京スカイツリー®デザインの発想の源

特集 1  
誕生記念インタビュー

彫刻家  
日本芸術院会員  
東京藝術大学 二元学長

澄川 喜一

限られた条件が生んだ「不思議さ」

——澄川先生は東京スカイツリー®のデザインを監修されました。今回の仕事に携わった経緯を教えてください。

【澄川】 僕は「そのある形」というテーマで四十年くらい彫刻作品を作っています。日本刀や神社の屋根に見られるのが「そり」、寺の柱などに見られる途中の膨らみが「むくり」です。このそりやむくりを取り入れ、高

さ九十メートルの東京湾アクアラインの換気塔「風の塔」(写真1)のデザインもしました。そうした要素を新しい電波塔に生かそうということ、日本のタワーの多くを手掛けた、東京スカイツリーの設計を担当した日建設計から声がかかったというのが、僕が携わった理由です。

——依頼を受け、最初に頭に浮かんだことは何でしょうか。イメージを作り、膨らませてい



写真1 風の塔

ったプロセスを教えてください。

【澄川】 最初に僕が言ったのが「シンプル・イズ・ビューティフル」という言葉です。ジェット機みたいに機能性を追求し、無駄なものを全部省いていった結果、美しさにつながる。そういうものにしたと思います。

そして、連想したのが五重塔です。僕は藝大に入る前に五重塔にすごく興味を持ち、構造を自分で調べ、それが彫刻家になるきっかけにもなりました。五重塔は「心柱」という中央の柱で支えられていますが、周囲の柱や屋根とは全く触れていません。心柱に支えられた法隆寺の五重塔は千三百年もの間、地震などに耐えてきました。この日本古来の建築技術を東京スカイツリーにも生かそうということ、設計者とすぐに考えが一致しました。

また、五重塔の一番上にある相輪（そうりん）注1は祈りを天に届け、宇宙と交信する「依り代（よりしろ）」注2として作られたものです。高い電波塔を作ると聞いて、これは現代の依り代だな、そういう意味でも五重塔につながると思いましたね。

——東京スカイツリーの敷地面積はかなり狭いと聞きましたが、そういう条件は、デザインを考える上で影響しましたか。

【澄川】 東京タワーは四辺あって一辺が約百

メートルですが、スカイツリーは正三角形で一辺が六十八メートルしかないんです。敷地が限られているからこの形しかできなかった。それに対して必要な構造を考えた結果、スリムでシンプルなデザインが生まれた。知恵と総合力の結晶ですよ。殷周銅器などの鼎（てい）も三本足ですが、設計者に聞いたら、三本足というのは一番安定して強いそうです。

土台は正三角形ですが、先端へ向かうに従って徐々に円形になるよう、設計者とデザインを考えました。東京スカイツリーの写真を撮っている人がよく、「あれ？」と言いながら撮る位置を変えているけど、そりやむくりを取り入れているから、角度によって正三角形に見えたり、塔が傾いて見えたりするんです。高さ百五十メートルまでできた時は、「おい、曲がつてるぞ」と友人から電話がかかってきました。その時は「しめしめ」と思って（笑）。そういう不思議さが、デザインの魅力だから。

——限られた条件が、不思議な魅力をつくるのにひと役買ったと。

【澄川】 そうですね。「これ、何？」と思わせる不思議さは美しさであり、絵も彫刻も不思議だから魅力があるんです。一番分かりやすいのは「モナリザ」。若いころ、フランスで見て不思議だなと思って。それで分かったのが目線が合わないうこと。一生懸命こっちは見ているのに見てくれない。それで深追いして失敗する（笑）。やっぱり不思議さは美しさであり、魅力だよ。

日本の建築物では、やっぱり法隆寺の五重塔でしょう。外国の人が見たら、必ず「きれいだ」って言いますよ。クレーンがない時代に高さ三十メートル以上の建物が建てられ、今も残っているというのも不思議ですよ。

東京スカイツリーは、最初は高さを六百メートルとしていたけど、アンテナの部分で二十四メートル伸ばして六百三十四メートルになったんです。五重塔は、相輪が全長の三分の一の比率が一番美しいんだけど、東京スカイツリーのアンテナの長さも、結果的に五重塔と相輪のバランスに近くなりました。

——デザイン上も構造的にも、「心柱」は東京スカイツリーの重要なポイントとなっていますね。

【澄川】 僕が藝大にいた時、谷中（やなか）（東京都台東区）の五重塔が火事で焼けたんです。僕はすぐそばに下宿していて燃えているところ

も、焼け跡も見ました。しっかり骨組みが残っていて、中の構造が全部見られたんです。心柱もちゃんと残っていて、「なるほど、こうなってるのか」と。

五重塔の構造についてはそれまで図解で見たりして勉強していたけど、実際に心柱を見る機会はほとんどないでしょ。それを自分の目で見たわけです。これは本当に貴重な経験をしましたよ。

僕たち藝大の学生はすぐ焼け跡の絵を描きに行きました。横山操さんという画家は、すごくいい絵(写真2)を描いています。僕は焼け跡で心柱の実物を見て、改めて五重塔のすごさ、美しさと不思議さを感じました。ずっと頭の底に残っていたその記憶が、今回、



写真2 横山操「塔」1957年(東京国立近代美術館所蔵)

東京スカイツリー<sup>®</sup>に心柱を採用するというコンセプトにつながったと思います。

### ものづくりの知恵と技術が結晶

——心柱をはじめ、東京スカイツリーは、随所に日本のものづくりの知恵が反映されていますね。

【澄川】単に世界一高いというだけじゃないんです。パイプ構造で、ジョイント部分は全て最先端の溶接技術が使われています。鉄だから日の当たる場所は毎日伸び縮みしてるんだけど、それもちゃんと計算されています。パイプで丸いでしょ。僕も工場で何度か見せてもらったけど、丸いもの同士をつなぐって本当に大変ですよ。図面おこしはコンピューター

ターでできても、溶接は最終的には手作業です。だから、東京スカイツリーは「手づくりの塔」なんですよ。

——色選びについても、かなり考えられたそうですね。

【澄川】色はとても重要なから、相当時間をかけました。いろんな色が候補に挙がりましてよ。最終的に白に決まったけど普通の白ではなく、隠し味のようにほんの少し、日本の伝統色である藍色を入れているんです。東京スカイツリーは丸いパイプ構造なので、それによって影が青く美しく出るんです。この色は「スカイツリーホワイト」と呼ばれていますよ。

——作業にもいろんな方が関わっていたと思います。震災時は建設作業の最中でしたが、無事故だったことが素晴らしいなと。

【澄川】僕も現場に何回か行きましたよ。「上を向いて がんばろう 日本」という大きな看板が掛かっている、五百人くらいの職人が朝の七時五十五分に集まって、お互いにもんな挨拶し合うんです。

北十間川きたじまがわに面した側は塀を作らなかつたので、作業を見学する人が毎日たくさんいて、

作業現場が舞台みたいでしたね。ヘルメットには名前と血液型が書いてあるので、「○○さん、今日いいね」なんて言われちゃう(笑)。見られていると思うから、ごみが落ちてたら、みんなすぐに拾ってました。

だから作業現場を一步出たら、みんな「はーっ」と息をついて、まさに舞台で出番が終わったみたいな(笑)。緊張感と誇りを持って、みんながしゃしゃきしゃきと動いていて、見ている気持ちよかったですね。

### 場所の力を生かした「ストーリー」を

【澄川】 東京スカイツリーのデザイン監修が決まってからすぐ、僕は建設予定地の周辺を歩き回って全部調べたんです。すぐそばに三囲神社という神社があつて、三井の本邸から移築された井戸があり、三本足の鳥居(写真3)があるんです。そのほかに牛嶋神社という神社もあつて、ここには珍しい三輪鳥居(写真4)があります。東京スカイツリーも三本足で建つでしょう。なぜか東京スカイツリーの周辺は「3」という数字に関係するものが多いんです。

——偶然なのか、それは不思議ですね。

【澄川】 そうそう。もう一つ面白いのは、歌川



写真3 三井邸より移す。原形は京都太秦・木鳥神社にある

国芳が「東都三ツ股の図」という浮世絵で東京スカイツリーによく似た塔を描いているんです。井戸の上の櫓(ぐら)らしいんだけど、場所も東京スカイツリーの近くなんですよ。このエリアには葛飾北斎もいたし、砂時計や江戸切子を作っている家内工業の工場が今もあるし。江戸文化の発祥の地みたいなところですよ。

——墨田区は小さな工場がいっぱいあり、そこに建つ東京スカイツリーは日本のものづくりの結晶という意味でも、つながってるなど。

【澄川】 あちこちに符合があるわけで、そう



写真4 牛嶋神社 三輪鳥居

やってつなげて考えれば面白いでしょ。東京スカイツリーだけでなく、周辺の神社などにも足を延ばす人が出てくると思います。

ただ世界一高いということだけじゃなく、ランドマークは物語をつくらないとだめなんです。例えば、東京スカイツリーの三角形から、3という数字と日本人との深い関わりみたいなことも考えられると思うし、まだまだストーリーは出てくると思う。みんながいろんなストーリーを与えたいと思いますよ。観光地ってみんなそうでしょ。いろんな人が磨いてきらきら光り始めると、見に行き

たくなる。それに必要なのはやはり歴史で、そこからおいしい名物や面白い店が生まれていくんだと思います。

また、東京スカイツリー®が建つエリアは安政の大地震(注3)や関東大震災、東京大空襲などで多くの犠牲者を出した場所でもあるんです。それに対する祈りの塔という意味もあるのかな、と僕は思っています。

東京タワーができたころの日本は高度成長期で、むしろ戦争のことを忘れようとしていたと思うけど、東京スカイツリーは建設している途中で、3・11の震災が起きた。そういう意味でも鎮魂の塔というか、造るべき時に造られた塔なのかなと思います。歴史って何か大きなものができる時に、いろんな意味が集約されるんだなあと。そういう点ではやはり、時代の変わり目の象徴なんだと思いますよ。

## 江戸の情緒を生かしたまちづくりへ

——東京スカイツリーができたことで、周辺のエリアがどのように発展していくか、というのを考えています。

【澄川】東京に欲しいのは、江戸の情緒ですね。今の街並みは直角、水平だからで情緒がないでしょう。無駄がないから合理的なんだけど、もつと丸みや温かみがあるといいなと

思います。

ただ、東京スカイツリーができたことで、すぐ下を流れる北十間川がきれいに整備されたでしょう。垂直に伸びる塔に対して、水平に流れる水を生かして、これはとてもいいことだと思います。これからは、周辺にも水を景観に生かす動きが広がればいいなと。それによって、隅田川の花火ももつと生きてくると思うしね。

——開業を直前に控えて、最後にメッセージをいただければ。

【澄川】東京スカイツリーは、背骨がすつと通った女性の立ち姿に似ていると僕は思っていて、「美しいレース編みをまとった貴婦人」と呼んでいます。そういうふうな、みんながそれぞれ自由に見て、好きな名前をつけてくれたらいいと思います。

天気がよければ、東京スカイツリーの展望台から東京湾が見られます。僕がデザインした「風の塔」も見えますから、展望台に上がったら、探してみてください。また、僕は『TO THE SKY』(写真5)というタイトル



写真5 TO THE SKY (江崎義一氏 撮影)

ですつと彫刻を作っていて、最新の作品を東京スカイツリーのそばに置きます。高さ十メートルの御影石を三本、鼎の形に立てたもので二年かけて作りました。この彫刻のどこかに、東京スカイツリーが不思議な角度で見える場所があるので、それもぜひ探してみてください。新しい撮影スポットになるかも? と思っています。(すみかわ きいち)

観光文化編集室インタビュー 片桐 美德  
井上 理江

(注1) 相輪…五重塔などの屋根から、天に向かって伸びる金属製の部分。

(注2) 依り代…神霊が寄りつく物や場所。

(注3) 安政の大地震…江戸時代の安政二年十月二日

(一八五五年十月十日)、関東地方南部で発生したマグニチュード6.9の地震。



# 都市景観的な視点から見た東京スカイツリー®

## 東京の新たな塔による都市形成と観光資源としての可能性

都市形成史家  
法政大学研究員

岡本 哲志

### 身体感覚でつくられた 日本の都市空間

ヨーロッパの古都は、その中心にランドマークとなる市庁舎や教会の「塔」がシンボリックな都市風景をつくりだす。隣接して設けられた広場は、コミュニティ機能として人々の生活の中心的な役割を担ってきた。日本には、一般の庶民が憩える広場はなかったが、さしずめ城下町の中心にある天守閣がランドマークとして、ヨーロッパの市庁舎や教会の「塔」と重なる。

東京、大阪、名古屋など、日本の代表的な現代都市は、近世初頭に全国的に建設された城下町がベースである。その城内は緑があふれ、城下は自然と田園に包まれていた。エコシティとしての都市風景が日本の至るところで描き出された。江戸時代に日本を訪

れたヨーロッパの人たちは、日本の素晴らしい都市風景を発見する。水と緑にあふれた城下町は、まさにパラダイスに映ったに違いない。明治以降、近代化に邁進した日本の人たちは、ヨーロッパの人たちの眼差しをフィルターとして、見慣れていたはずの風土を後に風景として再認識する。

ヨーロッパの古都には城壁がある。それに対して、日本の城下町では視覚的に内と外とを厳然と区別し、境界とする威圧的な城壁をつくらなかった。一般の庶民は城内に入ることは許されなかったが、豊かな水面や緑を離れた場所から楽しむことができた。城下町は水を巧みに利用してつくられたが、なかでも江戸は水の都としての美しさを誇った。都市と田園、背後の自然が一体となることを好んだ。一八〇九年（文化六年）に江戸の全貌を詳細に描いた鋳形蕙斎の鳥瞰図「江戸一目図

屏風」、あるいは蕙斎の孫にあたる鋳形蕙林の「大江戸鳥瞰図」などが、鳥の目線で水の都・江戸全体と富士山まで取り込めて描き込む。

鉄道や自動車主流になる以前、江戸の城下町は歩きと船に乗って移動することが中心であったし、それらを基本に江戸の都市空間がつくられた。船着き場や橋のたもとには、おのずと人の集まる場が誕生した。両国広小路、江戸橋広小路はにぎわいの中心となった。今で言う、都市観光の先駆けだった。徒歩と水上交通が主な移動手段の江戸は、身体感覚と呼応したスピードで風景を愛でる仕組みを備えていた。

### 江戸のランドマーク

江戸時代、江戸は世界有数の百万都市だった。産業革命で大量の労働人口がロンドンに集中する以前から、緑豊かな巨大都市が確



写真1 隅田川河口から浜離宮越しに見る東京タワー

下町建設期においても湊としての重要性は変わらなかった。上方などから物資を満載した船は、どのように江戸城近くまで行つたのだろうか。太平洋から浦賀水道を抜けて江戸湾に入った船は、最初のランドマークとして、左手に見える芝増上寺の大屋根を目印にした。さしずめ、現

立されていた。江戸の都市空間は、天守閣が重要なランドマークとなり、強い求心性をつくりだした。だが、それだけで江戸全体が成立していたわけではない。遠くの山や身近な低い丘がランドマークとして都市空間の骨格となり、奥行き感のある、変化に富んだ風景を日常生活の場から堪能できた。

江戸の都市計画を知る上で、富士山と筑波山が重要である。江戸城と城下が建設される時期、日本中からやってきた物資は、江戸城近くまで船で運び入れた。太田道灌の時代に重要な湊であった和田倉辺りは、江戸の城

代では東京タワーがその役割を果たしてきた(写真1)。しかしながら、高さを誇った東京タワーも、今では海側に超高層ビルが数多く立ち並んでしまい、ビルとビルの隙間からわずかに垣間見ることができただけとなった。

さて、芝増上寺の大屋根を確認してから、船は隅田川に入る。江戸時代の第一橋は永代橋だった。現在では、その手前下流に勝鬃橋など幾つかの橋が架けられ、第一橋ではない。だが、昭和初期に架設された男性的な力強いフォルムを見せる永代橋は、高層化した東京にあってひととき映える。その背後には六百三十四メートルもある高さの電波塔・東京スカイツリー®が見える。この辺りからの眺めは悪くない。東京スカイツリーからのすてきな贈り物は、その一直線上のさらに背後に筑波山が見えたころのイメージと重ねられることだ(写真2)。時空を超えた想像力をかきたてる東京スカイツリーに魅力を感じる。永代橋を過ぎて少し隅田川を遡ると、左手に日本橋川の入り口に位置する第一橋、豊海橋が見えてくる。日本橋川は人工の川である。曲がりくねった日本橋川を行き来していると、小名木川など江東にある運河のように直線でもないのではと、つい考えてしまいうだ。だが日本橋川の水路開削を命じた家康

は、舟運による物流の重要性を感じながらも、江戸城下に至る船が航行するプロセスを重視した。日本橋を頂点に「へ」の字を描く日本橋川を遡った時、江戸橋から日本橋の一直線上に富士山がまず見えるようにした。次に、日本橋で右に折れ曲がり、日本橋から一石橋の一直線上に船上から五層の壮大な天守閣を仰がせた。関八州を象徴する筑波山よりも、日本を代表する富士山よりも、天下一の江戸の天守閣を印象つけた。家康の意図が分かる、「へ」の字に曲がる頂点に日本橋がある重要性もはつきりする。残念ながら明暦の大

火(二六五七年)以降、天守閣は再建されずに現在まで至るが、もし天守閣が再建されたらと想像すると、船に揺られながらの楽しみも倍增する。江戸の都市計画は、広域の景観を取り込めたダイナミックな世界をつくりだした。



写真2 隅田川から永代橋と東京スカイツリー®を望む

## 生活の場からの風景

長屋に暮らす一般庶民が船に興じることはめつたにない。江戸市中でひとさわ高い火の見櫓があつても、彼らが気軽に登ることは禁じられており、高みの見物はできなかつた。ただ、手軽に非日常の世界を垣間見ることはできた。橋の上からの眺めは格別で、ダイナミックな風景を一般の庶民が感じられる場となつていた。日本橋の上からは、天守閣も富士山も見えたり、永代橋から筑波山が気軽に望めた。橋の上から、水面の広がりを眺めるだけでも、長屋住まいの庶民にとっては開放的な場となつたはずである。橋のためとて、花火などに興じることもできた。江戸の庶民は橋の上から風景を愛でる場に事欠かなかつたし、橋の上が視界の広がる絶好の場であつたことは間違いない。さらに橋のためとは、にぎわいの場ともなつていた。芝居や見世物の小屋、出店などが所狭しと並ぶ両国広小路、江戸橋広小路には、多くの人たちが集い、普段の生活空間では体験できない別の世界に浸れた。

江戸は、水路の他に坂道が都市空間のダイナミックさを演出した。富士見坂、汐見坂、江戸市中を一望する江戸見坂。江戸の市街に

坂道があることで、多くの景観ポイントが身近なところから体験できた。このように、屋外での眺望を十二分に堪能できたとしても、屋内は風景を愛でる場ではなかつた。特に明暦の大火以降になると、橋詰めの角地の家並みから少し飛び抜けた角櫓が禁止され、建物の二階部分は低く抑えられてきた。その小さな窓からも、外をのぞくと厳しく罰せられた。

## 東京に出現した塔

江戸時代に抑えられていた屋内から都市風景を愛でる行為が、明治に入つて一挙に解放される。明治初期の銀座煉瓦街には二階にベランダが設けられ、町の角地には時計塔など塔状の建物も出現する。庶民が暮らす家々の屋根には物干し台が設けられていった。そこからは、狭苦しい居住の場から解放される空間の広がり、ほんの少しの高低差でつくりだされた。

さらに庶民の欲求が拡大する。凌雲閣は、浅草に一八九〇年（明治二十三年）十一月に竣工した、十二階建ての高層建築物である。高層建築の先駆けとなつた凌雲閣は、写真家で東京市議会議員であつた江崎礼二の発案により建てられた。設計はお雇い外国人として来日し、日本の衛生工学を育てたウィリアム・

バートンである。日本初の電動式エレベーターも設置された。

完成当時、十二階建ての建物は珍しく、多くの人が高みの見物を楽しんだ。誰もが天守閣から眺める大名のステータスを満喫できた。木造建築の低い家並みからひとさわ飛び抜けたモダンな高層建築は、歓楽街・浅草の顔となり、明治・大正期の名所絵はがきにもしばしば登場した。丸の内にある丸ビルの窓からも凌雲閣が望めた。高い場所に立つ願望は誰しもあるが、単に高い所から見ただけでは、何度か上るうちに飽きてしまう。

凌雲閣は、関東大震災であえなく倒壊してしまつたが、再建されなかつた。東京に再びランドマークとなる建築物が登場するのは、一九五八年（昭和三十三年）、芝増上寺の敷地内に東京タワーが建設されるまで待たなければならなかつた。東京タワーの展望台からは、新たな視野で東京、関東平野を俯瞰することができるようになつた。日常生活の場を高所から、三次元的な視野で考えさせてくれることを可能にした。東京タワーは半世紀以上の歴史がありながら、常に多くの人たちが展望台に上り続けた。高度経済成長を経て、郊外へ拡大していく東京、立体化していく東京。変化する東京のダイナミズムを高

みから時代の変化とともに共通体験しておきたかったのかもしれない。

ただ見るだけではなかった。芝増上寺の境内に立地した場所性が意味を増し、見られる関係もつくりだした。高層ビルが林立するまでは、東京の街歩きにとって、格好のランドマークだった。東京を観光する人たちも、この塔をいつも身近に感じていたはずである(写真3)。東京タワーは、高度経済成長期以降の東京の都市観光に少なからず貢献し続けてきた。

### 東京スカイツリー®と水の都の復活

東京スカイツリーの人気は、地元押上(おしあげ)だけではない。面白いことに、明治期に凌雲閣で盛り上がった浅草がまず観光スポットになっ



写真3 道のアイストップに現れる東京タワー

た。東京スカイツリーから離れた場所でも、

観光地として人気を呼ぶ可能性が十分にあると分かった。そして、二〇二二年五月二十二日に竣工する東京スカイツリーでは、より高い位置から地上への視野を広げることができ。まさに、鍬形蕙斎

が描いた独特の鳥瞰図

の目線で東京をパノラマとして遠望できる。

絵画に描かれた、デフォルメされた日本特有の風景観が現実の風景と重なる。単に高所から現代の東京の眺望を楽しむだけではない。水の都としての東京の歴史と環境がオーバードップした風景が堪能できる。さらに、東京がエコシティーに変貌するプロセスも、年を重ねていけば楽しみの一つになるかもしれない。

東京スカイツリーの誕生で興味深いことは、日本橋の橋詰めに設けられた船着き場と、東京スカイツリーがセットになって、水上観光が盛り上がりを見せている点である。東京スカイツリーが北十間川という水路の脇にできたことで、水の都としての東京全体の都市



写真4 北十間川に入った船上から見た東京スカイツリー®

観光へと波及する可能性が十分にある(写真4)。その時、やはり定期船の運航は水の都復権には欠かせないポイントとなろう。さらに、日本橋川、神田川、小名木川など水路をネットワークする定期船が生活する人たちの足となれば、東京の本当の魅力を探れる都市観光になっていくことは間違いない。

現在、東京の水路には、日本橋の船着き場の他に、隅田川や日本橋川など、防災船着き場が幾つも設けられている。これらの船着き場が近い将来自由に使えるようになれば、水上観光の多様な楽しみ方のイメージが大いに膨らむはずである。

(おかもと さとし)

# 江東水路地帯と北十間川

きたじっけん

水面から見上げた「水路の町」の魅力と東京スカイツリー®

『東京水路をゆく』著者  
水路愛好家

石坂 善久

## 東京の水路に魅せられて

私は、川蒸気船をはじめとした河川舟運の歴史に惹かれたことがきっかけとなり、小型モーターボートで東京とその近郊の川や運河を、探索して楽しむようになりました。

かつて北関東一円と江戸・東京を結んだ、物流のメインラインであった江戸川の悠然たる流れ、首都を守る放水路として開削された荒川の、頼もしいまでの広大さ、そして水路の「都大路」たる隅田川の、美しい震災復興橋・梁群と船影が絶えないにぎわい……。

いずれも個性豊かな魅力に満ちあふれていますが、都内の水路をくまなく巡るうち、特に興味を覚えて、通うほどに強く引かれるようになった水路群がありました。今回のお題である、いわゆる江東デルタ地帯の掘割たちです。



図1 江東デルタ地帯MAP

出典：東洋経済新報社『東京水路をゆく』

## 江東水路の魅力

西を隅田川、東を荒川に挟まれた、墨田・江東・江戸川の三区にまたがる江東デルタ地帯の地図や航空写真を見てみると、縦横に水路が走っているのが分かります。江戸期の江東開発に伴い、舟運路として整備された掘割で、都建設局では「江東内部河川」と呼ばれて、荒川水系の河川として管理されています。戦後、埋め立てられて公園や道路用地など、他の用途に転用されたいぶ数を減らしましたが、それでも結構な延長の水路が、可航水路



写真1 高密度の桜並木が間近に楽しめる大横川

(船が通行可能な水路)としての状態を維持されながら息づいています。

銀座・築地あたりに広がっていた、隅田川西岸の水路群が震災残土の埋め立てなどにより、ほぼ消滅してしまったのを考えると、まさに貴重な存在で、東京の宝といっても言い過ぎではないでしょう。デルタ地帯の面積の過半を占める江東区が、「水彩都市」を自称して胸を張るのもうなすけません。そんな「江東水路地帯」の魅力をいくつか挙げてみましょう。

まず、「裏路地」を思わせるような、幅の狭い、住宅密集地を走る水路があること。11ページ掲載の「江東デルタ地帯MAP」(図1)でこれからお話しする場所をたどると、東京スカイツリー<sup>®</sup>との位置関係がお分かりになるかと思えます。洲崎、木場の周辺を走る大横川(写真1)が代表的ですが、狭いだけではありません。次々と現れる橋たちも桁下高が非常に低いため、干潮時でないと通れない区間が多く、潮時と照らし合わせて擦り抜ける、スリリングな面白さがあります。大横川はもう一つ、都内随一の桜密度を誇る河川でもあり、お花見の時期には多くの船が繰り出す水路でもあります。

橋といえば、関東大震災の復興事業で造

られた橋、いわゆる震災復興橋が多く生き残っていることも見逃せません。震災復興橋というと、永代橋など隅田川の大形橋梁が思い出されますが、江東の小河川に架かる、全長数十メートルの鋼橋たちも、大型橋にない独特の魅力があります。橋が低い位置に架かっていることもあり、これを手で触れられそうな近しさで鑑賞できるのも(写真2)、江東水路ならではの楽しみといえるでしょう。

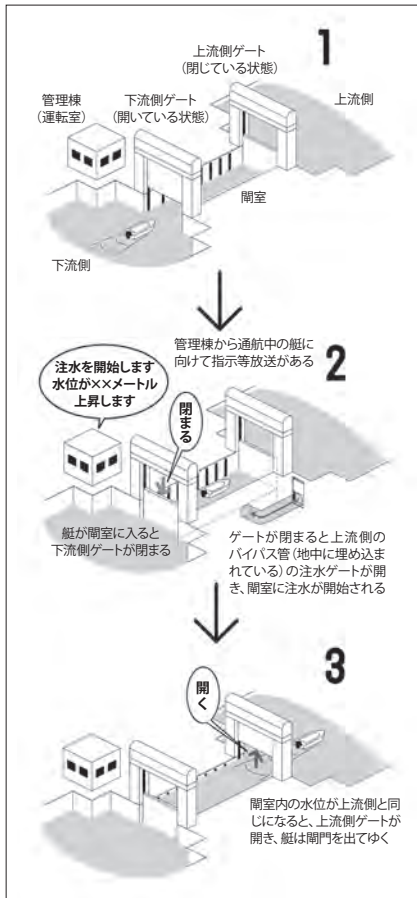
そして「水位低下化河川」と、それらへの通航を支える閘門こうもんの存在です。デルタ地帯東半部は地盤沈下により、いわゆるゼロメートル地帯となっていますが、水路もそれに合わせる形で、大潮の干潮時より約一メートル低い水位に維持されています。潮位によって変動する周囲の河川とは、当然水位差が生じるため、扇橋閘門

(写真3)、荒川口ツクゲートの二つの閘門を設けて、船の出入りができるようにしました。閘門とはいわば「船の階段」で、図のように二重に



写真2 デティールが美しい震災復興橋(小名木川・西深川橋)

図2 閘門の通航法



出典：東洋経済新報社『東京水路をゆく』



写真3 船の階段・扇橋閘門

うになりました。巨大な扉が水しぶきをあげて開き、船とともに水面が上下する様を体験できる閘門は、水路行の一大イベントといえるべきもので、通航を目的としたツアーも休日

の運転により、ますます増加することでしょう。祝日も通航できるよ

祝日も通航できるよ  
この四月より日曜・  
みこの運転でしたが、  
の四月より日曜・  
のです(図2)。  
これらの閘門は、  
従来平日・土曜日の  
の運転でしたが、  
の四月より日曜・

## 東京スカイツリー®と北十間川

東京スカイツリーの傍らを東西に流れる北十間川も、そんな魅力あふれる江東水路の一つ。水路幅は程良く狭く、曲流区間もあり探検気分が味わえ、東端部には首をすくめたくなるような低い橋もあるなど、三キロメートル余りの間に、さまざまな表情を見せてくれる水路です。

錆色の鋼矢板がむき出しだった護岸も、東京スカイツリー開業に合わせて急速に整備が進むようになり、あずまやや花壇を備えたテラス(写真4)が建設されつつあります。現在は工事たけなわで通航禁止の区間もありま



写真4 整備を終えた北十間川畔のテラス

から見上げることができたら、その威容もいや増して素晴らしい眺めになることでしょう。

この北十間川、地図の上では隅田川から旧中川まで、一本の水路に見えますが、実はそうではありません。スカイツリーのすぐ西、墨田区業平二丁目(あまのぼろ)の東武橋のあたりで、分断されているのです。分断地点には北十間川樋門(写真5)という、一種の水門があつて、隅田川からの水を調節しつつ、東へ流しています。この樋門を境にして、東側は「水位低下化河川」のため、水位差があつて船は通ることができません。北十間川は、スカイツリーのおびき元で、いわば袋小路になつてしま



写真5 北十間川樋門

っているのです。

私の小さな艇でも、転回に苦労するほどの狭い水路ですから、お客さんに乗せた観光船が入りするには、心もとなない環境と言わざるを得ません。川辺にテラスを整備して

も、これでは鑑賞用の「お庭の泉水」と同レベルではないでしょうか。せつかくの可航河川が生きてこない上、船々の行き来がなければ、水路の本当のにぎわいはないといつても、言い過ぎではないように思えるのです。

### 待たれる閘門の設置

「北十間川樋門のところに、閘門ができたならなあ……」と考えるようになったのは、閘門ファンであり、閘門の通航を大きな楽しみの一つとしてきた自分にとっては、ごく自然なことでした。直進して隅田川に出られるようになれば、大型の船も行き来できるように、スカイツリー効果と併せて水上観光も盛んになることでしょう。

とはいっても、閘門の建設や維持管理には、

莫大な費用がかかるでしょうから、軽々しく閘門を欲しがるのははかかられます。二〇二一年（平成二十三年）六月に、整備中の北十間川を陸路訪ねたところ、水路を塞ぐ形で浮橋が設けられていたのを目にし、やはり舟航は考えられていないのかと、がっかりして帰ってきたこともあったほどです。

しかし、墨田区のウェブサイトに掲載されていた、「北十間川水辺活用構想」の中の「北十間川親水整備構想」（図3）という記事を読んで、その認識を改めることになりました。

図3 北十間川親水整備構想



墨田区ウェブサイト「北十間川水辺活用構想」より

図4 北十間川に計画中の閘門（墨田区都市整備部道路公園課）

考え方：新タワーへのゲートとして、隣接する大横川親水公園と一体となった賑わいある親水空間形成を目指す

整備メニュー：舟運が可能な閘門（樋門の改良） ・ 河川沿いの歩行者デッキ ・ テラス  
 ・ 休憩施設 ・ 観光交流 ・ 体験学習施設 等

舟運が可能な閘門（マイターゲート）イメージ平面図

高水位（隅田川側）  
低水位（旧中川側）  
閘門イメージ

墨田区ウェブサイト「北十間川水辺活用構想」より



記事は、東京スカイツリー®開業に連動して行われる、北十間川畔のテラスをはじめ、周辺地域を含めたさまざまな整備構想を述べたもの。その中に、閘門の設置計画(図4)も掲載されていたのです。

個人的にもうれしいことでしたが、構想の発表が二〇〇七年(平成十九年)、もう六年が経っており、先に見た浮橋の件も気にかかりました。「もしかしたら、閘門の計画は立ち消えになったのかも」と、もやもやとした日々を過ごしていたところ、本稿のお話をいただいたので、機会到来とばかりに、墨田区役所道路公園課にお尋ねしてみました。

## 進行中の「北十間川閘門」計画

まず閘門の建設計画ですが、結論から申し上げれば、今もって推進されており、少なくとも立ち消えにはなっていません(ホッとしました)。

周辺の整備に比べて、着工が遅くなっている理由としては、スカイツリー前の北十間川を通航する船体規格および、閘門完成後の事業主体や将来の管理者が決まっていないこと、樋門西側の耐震護岸整備計画との整合などが挙げられました。なお、船体規格については、最近になって都から示されたとの

ことで、これで閘門の寸法が検討できるようになったそうです。

特に興味を覚えたのが、構想の挿絵に、扇橋荒川の二閘門のようなローラーゲート(ギョチン式に上下する扉)ではなく、マイターゲート(観音開き式扉)(図4、写真6)が描かれていたこと。この点については、「維持管理の面で沈殿物が堆積しにくいことや、インシャルコストやランニングコストが安価ではないか」との理由が挙げられていましたが、扉が上がった際の不快な滴に悩まされないので、主に観光航路として活用されることを考えれば、非常によい選択だと思えます。

閘門の計画が生きているということは、もちろんスカイツリー前の北十間川も、舟航を



写真6 マイターゲート(観音開き式扉) 閘門の例  
富山市・牛島閘門

前提として整備されているということであり、水路ファンとしても喜ばしい限りではあります。ただし、上記のように懸案事項もいまだ少なくないことから、「区としての構想を計画変更する考えはないが、着工までにはかなりの時間と関係機関の協力が必要」と、実現までの道のりは、決して平坦でないことを感じさせました。

## 船々の行き交う水路から 見上げる塔を夢見て

長らく分断されていた北十間川の西端部分が、閘門によって一つとなり、船影もまただったこの区間に、再び船々が繁く行き交う水路風景が見られるであろうことは、思うだけに楽しいことです。

閘門を通る楽しさ、干潮面より低い「水面下の水面」に遊ぶ楽しさ、加えて天を突くスカイツリーを間近に見上げる楽しさと、三つの非日常感あふれる楽しさが一度に味わえる、都内屈指の刺激的な水路となることでしょう。閘門の完成によって、プレジャーボートが、カヤックが、そして観光船が、自由に船行きする光景が実現することを、願ってやみません。

(いしざか よしひさ)

# 東京スカイツリー®と下町文化の融合を探る

## 現代技術の粋が放つエネルギーを観光・地域活性化のパワーに変換する

一般社団法人墨田区観光協会 理事長

阿部 貴明

今、この街は上を向いた人であふれている。これほどの人たちが、大きな期待と少しの不安を抱きながら、将来に向かって、前向きに、しかも同じ話題で盛り上がっている街が他にあるだろうか。

二〇〇四年からの、地元挙げての誘致活動が結実し、新たな電波塔の建設予定地として、墨田区の業平橋・押上地区が決定した。二〇〇六年から、隅田川東岸に位置する下町墨田は大きく変わり始めた。江戸時代からの下町文化を継承するこの地域に、日本古来の技と最新技術に支えられた世界一の塔が建つ意義は、計り知れないエネルギーを放つ東京スカイツリー®の開業を契機にした、次代につなぐ新たなまちづくりそのものである。

### 国際観光都市と新たな付加価値

墨田区は、江戸の生活を支えた職人と商人

の町として栄えた南部・本所地区と、江戸から隅田川を挟み、隠れ家的で粋な空間を漂わせた北部・向島地区が融合して、独特な下町文化を形成してきた。区内でも地域ごとの特色があり、ひとことで表現するのは困難だが、あえてひと言で言うなら、「ものづくり」の街である。

この「ものづくり」は、繊維やゴム製品、化学品から金属加工品に至る幅広い、「工業的ものづくり」と、人形や羽子板、飾り物や指し物などの「伝統工芸的ものづくり」、和菓子や和総菜などの「銘品銘菓的ものづくり」から成り立ち、いわゆる匠の技による、こだわりの製品を作ってきた街である**写真1、2**。

奥ゆかしくも漂々しい職人の街に、東京スカイツリーが開業することとなり、墨田区は、「国際観光都市」として、新たな付加価値を創造することを、今後の発展の目標に据えた。



写真1 「すみだのマイスター」  
ガラス工芸の達人



写真2 江戸切り「鯛 大鉢」  
すみだ江戸切り館所蔵 (非売品)

同時に、東京都二十三区で初めて、一般社団法人として墨田区観光協会を二〇〇九年春に設立し、公益的収益事業を展開するため、民間主導の着地型観光のプラットフォームをつくりだした。以来、区と協会の理想的な二人三脚がスタートした。

### 「本物が生きる街」

墨田区観光協会が発足して以来、活動の根幹を表現するスローガンとして「本物が生きる街」を掲げている。本物の光を放つモノには必ず物語がある。モノの価値は、物語に

裏打ちされて初めて正当に評価される。観光が、その土地や地域の「光」を「観」に来て、楽しんでいただけることだとすると、墨田区にとって本物の光を明確に意識して、そこからぶれないことが必要だという信念である。

史実を全て追いかけることは紙面の限りのなかで無理であるが、墨田区は多くのモノやコトの「発祥の地」であったり、多くの歴史上の人物の「生誕の地」であったりする。隅田川と墨堤の周辺では風雅を求めて、多くの文人墨客が遊び、居を構え、発想を巡らせた。本所・両国の周辺を例に取っても、川遊び



写真3 隅田川の花火

や花火（写真3）、両国広小路や回向院の由来、相撲と国技館、葛飾北斎や勝海舟の生誕、忠臣蔵討ち入りの吉良邸、江戸前の握りずしの発祥とされる与兵衛鮎、などなど。本物を枚挙するにいとまがない。

ただ、残念なことは、明暦の大火（二六五七年、関東大震災（一九三三年）等の天災害と第二次世界大戦によって焦土と化してしまつた墨田区、特に南部地域には、歴史を裏つけるモノがほとんど残っていない。しかし、物語が明確に存在するなかで、最新の情報通信技術を最大限に駆使しながら、古地図と現地図の位置情報による掛け合わせや、拡張現実やコンピュータグラフィックによる再現情報の発信等、リアルとバーチャル、アナログとデジタルの組み合わせによって、本物の光をたどり歩いていただけるツアーが用意できる（図1）。

墨田区観光協会が広義のメディア事業を積極的に展開している理由もそこにある。

### 「こだわり」の情報運用

ものづくりの街、職人の街として江戸から東京、そして日本の経済を支えてきた墨田区は、必ずしも発信力が強くなかった。真面目で寡黙に坦々と仕事をしてきた結果、たくさ

図1 すみだ観光ITメニュー 下町散歩自由自在

**すみだ観光  
IT視察ツアーも  
実施予定**

**街歩きをより楽しく、より便利に～すみだ観光IT活用～**

<p><b>アプリケーション</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>今散歩 スマホアプリ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>電子書籍</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>YouTube Tokyo Downtown Cool</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>facebook SNS</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>デジタルサイネージ</p> </div> </div>	<p><b>ポイント・言語</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>ポイント</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>通訳</p> </div> </div>	<p><b>通信・電源</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>公衆無線LAN</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>電源 ステーション</p> </div> </div>
---	--	---

一般社団法人墨田区観光協会ホームページより

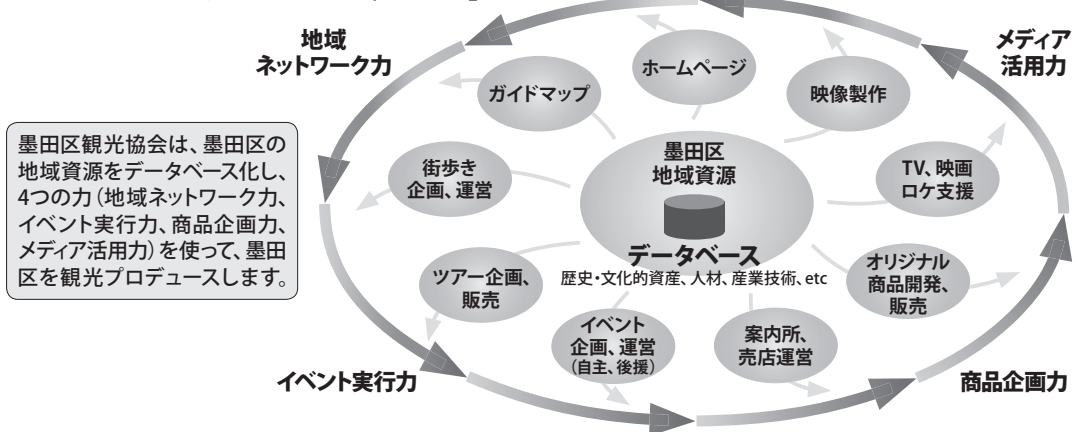
んのモノを技術で表現してきたが、その貴重な物語が情報として運用されてこなかった。ましてや、ものづくりが観光資源になるなどということとは、考えてもいなかった。

光の価値を認め、見に来ていただけるお客さまはマスである必要が本当にあるのだろうか。墨田区が標榜すべき観光は、テーマを明確にした「こだわり」の観光であるべきではないだろうか。それが「本物が生きる街」を見ていただく唯一の方法ではないだろうか。

墨田区観光協会が展開するメディア事業は、価値観を共有していただけるお客さまに対して、選択的に物語情報をお届けする仕組みづくりが最大の命題である。単なる事実情報の発信ではなく、特定のテーマに深く興味のある潜在的なお客さまに対して、確実に情報が伝達される共感の仕組みづくりである(図2)。

観光テーマの絞り込みと同時に、年齢・性別はもとより、教育旅行や富裕層をターゲットにしたツアー造成、オンラインゲームの参加者や金融機関の顧客会員向けなどの、すでにプールのされているプロフィール集団に向けたお誘い、今までの行政的なシティープロモーションではカバーし切れなかった顧客層にも、積極的に情報を流していくことにより、

図2 墨田区観光協会 観光戦略「4つの力」



効率的かつ効果的な観光誘客ができるものと思っている。

## 観光地に住みたい街か

メインスローガンである「本物が生きる街」に続く、観光戦略の根幹を成す目標は、「一度は訪れてみたい街、何度も訪れてみたい街、いつかは住んでみたい憧れの街」の創造である。

そもそも、シティープロモーションの大義は、その街の魅力をより多くの人たちに理解していただき、交流人口を増やすことによる経済の活性化と同時に、定着・永住人口を増やすことである。それが正しい理解だとすると、「ものづくり」の街が「観光」の街に変貌する過程で、元々ある「ものづくり」が衰退したり、今の住民が住みにくくなってしまったら、本末転倒である。

街が観光地化するなかで、交通渋滞や事故、騒音やゴミ、さらには犯罪等のマイナス効果を懸念する声が多いのも事実である。行政や観光協会の役目の一つとして、それらの懸念材料を払拭できるような具体的な施策や仕組みを考え、実行していかなければならない。その一方で、東京スカイツリー®を訪れる多くの人たちに、街なかを広範囲に巡り、新たな発見とともに楽しんでいただかねばならない。

国際観光都市として栄える条件と、仕事がいやしく住みやすい街である条件は、多くが共通すると思われる。元来、人は人が集まるところに集まる習性がある。都市型の、人が集まる要因のキーワードは利便性であろう。その上に、安全性や子供の教育環境が整っていること。一方で、没個性的で無機質な街が好まれてきた傾向が、家族や世間の絆を大切にしながら、人間味あふれる生活環境への憧れに、方向転換しようとしているように感じる。



写真4 牛嶋神社の例大祭

観光地か住宅地かというよりむしろ、現代都市型か下町人情型かますます重要なポイントであると思う。墨田区には、まだまだ下町の文化が残っている(写真4)。その素朴な人情文化に光を当てて、見てもらいたい街が実現すれば、間違いなく、訪れてみたい街が生活の場になるであろう。仕事をする生活だとすると、「住みたい街の創造」を明確に意識した観光都市づくりが実現すれば、「ものづくり」も継承され、次代への発展も期待される。同時に、下町商店街の役割も改めて見直され、便利で楽しい日常と、いざという時の共助が機能する。そこに、日本らしい街が再構築され、そのこと自体が新たな光となって、多くの人をお迎えすることになると思うのである。圧倒的に下町らしい個人的なまちづくりをすることにより、その文化に親和性の高いお客さまにお訪ねいただくこと、そのことによって、前述した懸念は杞憂(きぼう)に変わるのではないだろうか。

## 伝統・文化を次代につなぐ

海外から、国にとって大事なお客さまが来日する。民間交流や国際貿易に関連して多くのお客さまが来日する。東京で忙しく仕事

をこなしながら、当然の期待は「日本らしさ」を見て、肌で感じたい。残念ながら、京都や奈良に移動することが多いようだ。もちろん、それも大いに結構だと思うが、東京でも日本を体感できる場所があるのに……と残念に感じる。

確かに、屋敷や風景は焼失して存在していないが、伝統や文化は脈々と受け継がれている。ただ、正直な実情は、あとしばらく放置すると、消滅してしまうところまで来ていたかもしれない。東京スカイツリー®の放つエネルギーによって、千載一遇のチャンスが巡ってきた。向島の料亭街では、朝から毎日、百数十名の芸妓衆が見番で踊り、笛、鳴り物、清元長唄、常磐津等の稽古をしている(写真5)。



写真5 向島芸妓の踊り 身近に感じる江戸の伝統芸

おもてなしの心とともに作法、所作を身につける努力を欠かささない。髪結いをして、化粧をして、お座敷の準備をしてお客さまを待っている。都

内随一の規模を誇る向島の料亭文化にも改めて光が当たれる機会が巡ってきた。

職人の匠の技を代々引き継いできた伝統工芸師も数多く活躍している。多くの来訪者が期待されるなか、工房を整備したり、技術を生かしながら新たな工夫を凝らした商品に取り組んだり、お客さまをお迎えする準備、万端である。腕を引き継ぐ弟子や世継ぎが現れ、ますます張り切っている。

さまざまな物語を背景に、長年努力をしてきた銘菓や銘品にも、新たな注目が集まる。皆、本物の価値を磨き直している。

伝統や文化は、大事に保護され始めた瞬間に衰退を始める。大衆に評価され、支持され、経済が回ってこそ、伝統・文化の価値が上がり、長く存続する基盤と理由が出来上がる。あえて俗に表現すると、儲からなければ続かないし、次代につなぐことはできないのである。下町の伝統と文化の承継のためにも、東京スカイツリーの放つエネルギーの拡散を期待せずにいられない。

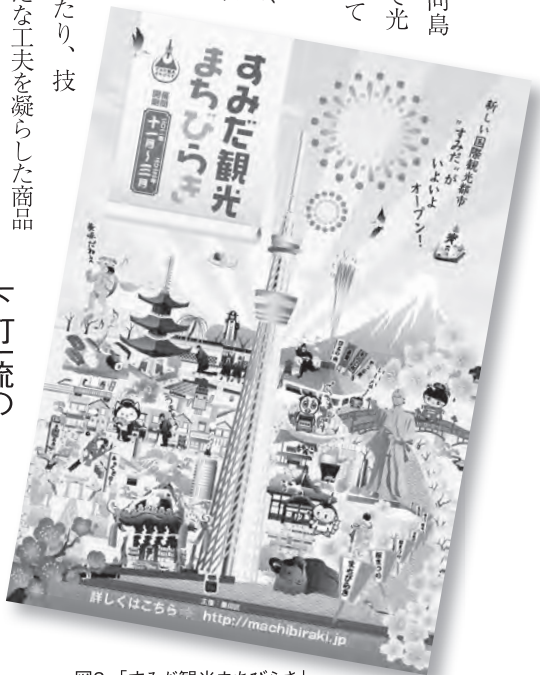


図3 「すみだ観光まちびらき」  
2012年5月19～20日、東京スカイツリー® 開業  
歓迎の区民イベントが盛大に開催される

### 下町一流の「世間」の縁結びと郷土愛

縁は大切である。東京スカイツリーの出現はまさに縁である。墨田区の下町一流の「世間」のなかに飛び込んできた世界一の高さのタワー(図3)。お互いに仲良くし、融合のパワーを生み出すことが、当然の流れである。チャンスとは、その時その場所にいたか。タイミングとは、熟したリングが落ちる時。このタイミングにこの墨田区にいる私たちは、確実に幸せなのだと思う。その幸せを次代につなぐ責任が私たちにはあることを、忘れてはならない。東京にも、立派に郷土愛が残っていることを、誇りに思わなければならない。

(あべ たかあき)

# 三陸の観光復興 ——岩手県田野畑村の取り組み(5)

公益財団法人日本交通公社 主任研究員

## 大隅 一志

東日本大震災の被災地では、復旧・復興に向けた五里霧中の作業が進むなか、再び新たな年度を迎えた。本誌209号から四回にわたり紹介してきた岩手県田野畑村の観光と村復興に向けたこの一年の取り組みを振り返り、総括したい。

### 田野畑村の復興に向けたこの一年

震災からのこの一年、田野畑村では復旧・復興に向けたさまざまな取り組みが進められてきた。当財団も、その一部に関わりながら支援をさせていただいた(表1)。

村が設置した田野畑村災害復興計画策定委員会では、筆者も策定委員として参画し、観光復興計画の策定を担った。昨年四月下旬の委員会設置以降、委員会は部門別計画策定チームの合同会議も含め延べ九回の協議を重ね、本年三月末に復興実施計画の策定が終了した。

当財団では、現地の被災状況調査、関係者ヒアリングをはじめ、地元NPOとの協働で、来訪者への聞き取り調

査や津波災害により生まれた新たな資源調査などを実施してきた。この間、「サッパ船アドベンチャーズ」の再開に加え、「津波語り部ガイド」プログラムの提供も開始するなど、村の観光は復興への一歩を踏み出した。

### 田野畑村の取り組みから考える三陸の観光復興の方向、そして課題

本研究ノートでは、田野畑村の観光復興への取り組みを紹介するにあたり三つの視点を据えた(本誌209号を参照)。ここでは、それぞれの視点を交えて村のこの一年を振り返るとともに、震災復興における観光の役割や方向および課題を整理する。

#### 【視点1】観光復興の方向とそのプロセス・手法

#### ●震災を糧としたこれからの三陸観光の方向

田野畑村では、七月下旬、番屋エコツーリズムの中核プログラムである「サッパ船アドベンチャーズ」を再開したの続き、他地域に先駆けて、被

表1 田野畑村の復興への歩み

平成24年			平成23年										
4月	3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月
													村全体
復興対策室を復興対策課に格上げ 三陸鉄道田野畑・陸中野田間が運転再開	NHKドラマ「それからの海」放送 東日本大震災一周年追悼式 番屋再生プロジェクト第1回ワークショップ開催	NHKドラマ「それからの海」放送 東日本大震災一周年追悼式 番屋再生プロジェクト第1回ワークショップ開催	第7回JTB文化交流賞の最優秀賞を 体験村となのはたネットワークが受賞										村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業
													村復興計画/財団支援事業

災体験を持つ住民が自ら被災地を案内し、被災体験や津波と向き合う三陸の暮らしを通して防災の重要性を伝える「津波語り部ガイド」プログラムの提供を開始した。提供を始めてから本年三月までの語り部ガイドプログラムの参加者は、旅行会社のツアー客も含め延べ二千五百人を超える。

「見る」ことに重点が置かれた周遊型の三陸観光が次第に鮮度を失いつつあるなかで、未曾有の震災を経験した三陸のこれからの観光には、「支援」「交流」そして「学び」が重要な要素になると思われる。当財団がNPO法人体験村・たのはたネットワークと協働で昨年夏に実施した北山崎来訪者への聞き取り調査では、「被災地を見る」ことを目的とした人も多く、興味や関心では、自然や食と並んで「震災を学ぶ」「自然を学ぶ」「復興を支援する」ことが上位に挙げられていた。

現在、被災地を案内するガイドプログラムは、震災からの復旧途上にある被災地にとって、従来の観光が展開できないなかで限られた観光目的の一つとなっているが、単なる被災地巡りにとどまっていたのでは本来の観光復興を遂げることはできない。今後の三陸の観光には、美しさの半面で脅威（驚異）でもある自然、その上に積み重ねられてきた歴史や人々の暮らし方、復興に立ち向かう姿などを通して三陸ならではの特性を浮かび上げさせ、そこか

ら何かを学び、少しでも地域を支えていくことのできる観光、復旧の後にも色あせることのない観光を創り出していくことが重要である。

### ●宿泊施設の再生

田野畑村では、宿泊施設の大半が沿岸部に立地していたため、その多くが被災し、宿泊収容力は五分の一にまで減少した。とりわけ、ツアー客を受け止められるホテル、旅館や漁村集落とともにあった民宿の再生は、三陸の観光復興に欠かせない課題である。そうしたなか、田野畑村では、三陸周遊観光の宿泊拠点でもあったホテル羅賀荘（三階まで津波で被災）が本年度内に再建される見通しとなった（写真1）。



写真1 再建のめどが立った「ホテル羅賀荘」

再建にあたっては、被災した二、三階の宿泊利用を避ける方向であるが、新たな宿泊施設としての再出発には、安全対策の強化に加え、今後の村の観光の柱となる学びや支援、体験などを求める旅行者にも価値ある宿泊体験を提供していくことができる施設へとハード、ソフト両面の充実が求められている。

一方、民宿の再生には、被災集落の再建や高齢化・後継者不足などの問

題が絡んでおり、長い目での取り組みが必要と思われる（後述）。

### 「視点2」被災地復興における観光の役割・活かし方

#### ●積極的な観光からのアプローチを試みた復興計画

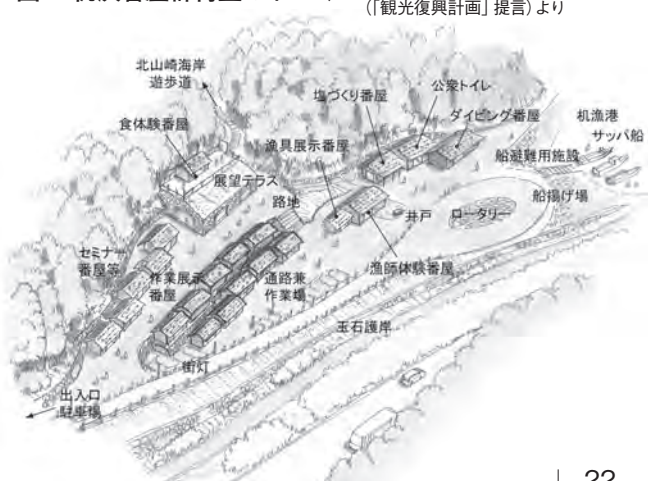
被災地域にとって、被災された方々の生活再建は最優先の課題とされる一方で、観光の復興は後回しにされがちである。その意味で、観光を村復興の重要な柱の一つに据えた田野畑村の観光への期待の大きさがうかがえる。委員会では、コミュニティ、水産業、福祉、防災など復興に欠かせないさまざまな計画検討の中で、常に観光を意識した協議がなされ、観光的な利用を尊重したふるさと漁村の再生（羅賀地区）、都市住民サポーターを巻き込んだ「机浜番屋群」の再生（机浜地区）をはじめ、各地区の再生や水産業との連携など、観光を活かした復興の方向性を計画に盛り込むことができたように思う。

#### ●動き始めた「机浜番屋群再生プロジェクト」

「机浜番屋群再生プロジェクト」は、被災した漁師の番屋を再建しながら、三陸の漁村文化の伝承と体験・交流拠点の創出を図るもので、本格的な「海業」展開への第一歩となるとともに、村がサポーターを巻き込んだ支援交流型の観光を育てていく狙いも持つ

東日本大震災田野畑村災害復興計画（「観光復興計画」提言）より

### 図1 机浜番屋群再生のイメージ



ている（図1）。昨年八月に立ち上がったこのプロジェクトには、現在六十人ほどのサポーターが登録しており、本年度から二カ年をかけて番屋群の再生を目指す予定である。

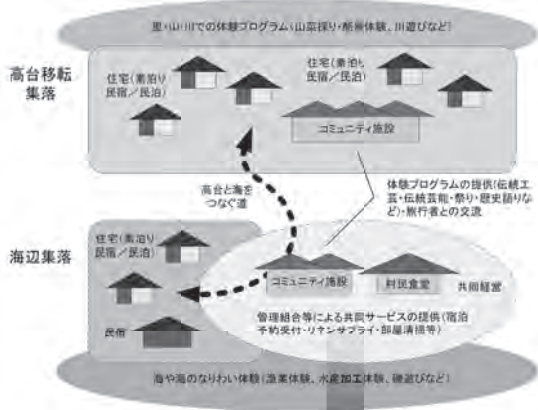
#### ●復興計画策定の現実的な難しさ

復興計画を構成する各方面の計画に観光の視点が配慮された一方で、「未来に向けた復興」を実現していくための理想的な計画を策定することの難しさも実感した。

例えば、社会生活基盤や漁港・水産関連施設など緊急性の高い復旧事業においては、将来的な景観や観光利用も含めて付加価値の高い利用空間としていくための十分な検討余地が



図2 地区ぐるみの観光事業の取り組みイメージ



東日本大震災田野畑村災害復興計画（「観光復興計画」提言）より

とれないままに、緊急復旧を進めざるを得ないのが実情である。また、さまざまな復興事業が各分庁や県の補助事業などを活用した縦割りの枠組みの中で行われることも、将来的な価値な取り組みを進めていく上ではネックとなっている。

●被災集落再建・コミュニティ再生における観光の活かし方

田野畑村の被災集落再建については、大半の被災住民の高台移転を中心に、一部移転+高上げ、現地復興という複合的な再建方向となった。こうした集落再建やコミュニティの再生に観光を活かしていく方向としては、新たな魅力となる三陸の集落景観の創出や、被災地区の住民が主体となった

観光事業の展開などが考えられる。

特に後者では、集落ぐるみの宿泊施設や飲食サービスの提供などがある。例えば各戸が素泊り型の宿泊形態として、飲食サービスや清掃、リネンサプライなどは地区住民が共同で行うことで、高齢者の負担が軽減されコミュニティビジネスの芽も生まれる。さらに、地区らしい体験（漁業、伝統工芸、料理など）の提供や交流機会の創出は、高齢者の生きがいの創出や清掃、地区の祭りなどコミュニティ活動の支援につながり得る。こうした取り組みには、事業化にあたり法的制約などクリアすべき課題もあり、また地区の将来像を住民自身で描き合意形成を図っていくステップが必要であるが、残存集落住民と移転住民とに分断されたコミュニティの再生、居住者の高齢化や担い手不足といった三陸漁村の抱える問題にも対応したコミュニティ・ベースの観光への取り組みのあり方として検討されてよいのではないだろうか（図2）。

【視点3】被災地・観光地支援のあり方  
●復興支援に必要な「地域への想い」と「信頼関係」

人的余裕のほとんどない被災地の復興支援においては、当然のことながら、外部からの多分野にわたる専門家の支援が必要である。田野畑村の復興計画の策定に関わった委員には、

村との付き合いの深い方が多く、利害を超えて村の復興を願う想いが、真剣な議論の場の雰囲気をつくりあげていた。一方通行のボランティア活動が被災地の負担増につながりかねないのと同様に、専門家の支援においても、支援する地域の実情をよく理解し、地域との信頼関係が構築できていることが、復興を支援する上での前提と言える。

●これから重要な復興プロセスの  
マネジメント

今後、被災地の現場では、復興計画に盛り込まれた多種多様な事業が実行されていくことになる。今後五年、十年といったスパンで、被災地域が望ましい復旧・復興を遂げていくためには、各種事業を調整しながら効果的に実行していく体制が必要である。

当然のことながら、その中心となるのは役場（行政）である。田野畑村では、震災後に新設された復興対策室を本年度から復興対策課に格上げした。縦割りになりがちな多様な事業を横断的に調整しマネジメントしていく役割が求められる。

一方で、行政を支える機能も必要である。田野畑村では、復興計画の進行的な機能として、復興計画策定委員のメンバーが継続的に関わり、復興計画に基づいた住民協議や具体計画づくりへの橋渡し役を担うべく、行政をサポートしていく予定である。

「地域の力」を  
復興の推進力に変えて

他の三陸被災地の多くが、被災者の生活再建に手いっぱい、「観光どころではない」状況のなかで、田野畑村が観光復興への一歩を踏み出すことができた背景には、災害復旧にどこよりも早く動き出した行政の力、失ったサツパ船をすくさま調達し五カ月足らずでツアーの再開にこぎ着け、津波の語り部ガイドの受け入れまで始めたNPO法人体験村・たのはたネットワークのスタッフや漁師、村民の力等々、さまざまな「地域の力」がある。さらに、復興計画の策定委員をはじめ、田野畑村への強い思いを持つ専門家が多く集まったのも、村がこれまで多様な交流を通して構築してきたネットワークの力であり、さらに村の復興の力になりたいと願う都市サポーターもたくさん生まれている。これからの復興には、こうした村内外の力が集まった「地域の力」をさらに発揮していくことが必要であろう。

当財団も、その力の一部として、田野畑村、三陸地域の復興の力になればと思う。（おおすみ かずし）



写真2 4月1日、約1年ぶりに三陸鉄道田野畑～陸中野田間が開通して賑わう田野畑駅（提供：田野畑村）



連載Ⅰ  
あの町この町  
第49回

# 共存共栄 ——京都府綾部市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラスト)著者

京都の西に二つの「オオエヤマ」がある。

一つは京都市西京区の西のはし、通称「老ノ坂」付近の山並みで、大枝山、また大江山とも書いた。古くは山城国やましろのくにと丹波国たんばのくにの国境にあたり、標高は三〇〇メートル前後だが山が入り組んでいて、保津峡が削いだように深いV字谷をつくっている。古文書には、「大枝山中強盗廿人」などとあって、平安の昔から京荒らしの盗賊は、たいていここへ逃げこんだ。酒吞童子を祀るという首塚や鬼塚がある。

もう一つは京都府北西端に近い大江山で、別名千丈ヶ岳、八〇〇メートルをこえる岩山である。こちらは丹波と丹後の境界にあたり、小倉百人一首の「大江山いく野の道の遠ければ」とうたわれたのはこの山である。ここに酒吞童子が本拠地にしたという洞穴があつて「鬼穴」とよばれている。

都の人にとって西の山向こうは鬼の棲む恐

いところだったのだろう。いわば異界であり、この世ならぬ魍魎ちやうりやうがひそんでいる。歴史が根づけたイメージは強いもので、いまでは京都縦貫道路（京都丹波道路）がつつ走り、JR山陰線が通勤電車のように軽快に走っているというのに、老ノ坂の西は「ちがうところ」といった見方をされる。距離では近いが、心理的には遠いのだ。

丹波の「綾部」という美しい地名は、古代に綾織技術をもつ帰化人秦氏の一族が住みついたことによるそう。京都から特急で一時間と少し。通勤圏にひとしい近さなのに、気がつくとなにやらはるばると遠方に行ってきた旅行者のころになつていった。

綾部のことはまるきり知らない人でも「グンゼの肌着」はごぞんじだろう。シャツやパンツ、ももひき、靴下……。日常の衣類となるとグンゼが欠かせない。安くて、しっか

りした商品のイメージがある。なぜそんなふうに思うのか、われながらはつきりしないが、小さいときから親しむなかで出来たようだ。そのグンゼは当地綾部から始まった。

また歴史好きの人なら「大本教」とのかわりで綾部を記憶しているかもしれない。

「大本教、不敬罪等で幹部一斉検挙」  
歴史年表には大正十年と昭和十年の二度にわたり、そんな項目で出ている。二度目のときは結社が禁止され、綾部の本殿がダイナマイトで爆破された。

「さて、どちらを先に訪ねるか……」  
地図をにらんで思索した。JRの駅と線路をはさみ、大きく分けると南が大本関係、北がグンゼ・エリア。歴史的には町は南にひらけた。旧九鬼氏二万石。ふつうなら丹波の小さな城下町といったエピソードにとどまるはずが、ひょんなことから昭和史の舞台にな



本通りの老舗

り、ファッション業界にも顔出しをする。

歴史を優先して南に向かつて歩き出した。若葉のところで、深呼吸したいほど空気が爽かだ。一方に由良川、三方に山。綾部は文字どおり山と川のある町であって、落ち着いた家並みがつづいている。

そんな一角に風雅な店を見つけた。瓦屋根の二階建てに土壁、古い町屋におなじみだが、二階が低くつくってあって、軒が深い。大きく「くすり」とあって、正面ガラス戸の板に太い字で「遠坂薬局本店」と、原稿のマス目を埋めるようにして入れてある。磨き上げたガラスごしに明治・大正のころの立派な看板が見える。「カゼに紫胡桂枝湯」、「ひどい疲れにきの一丸」などの手書きの貼り紙。しかし漢方薬専門というのではなく、「生環研のプロポリスゴールド」といった最新医学の商品も掲げている。夜ふけに駆けつける人を想定してだろう、つき出た灯の下に呼鈴がついていて、念入りに「呼鈴 BELL」の注意書き、横に懐中電灯が添えてある。とっくに百年は経た建物と思われるが、えもいえぬ風格があつて、なおかつ「困ったときはどうぞ」の姿勢がみちみちている。

「大本」の標示のある四つ角を曲がると、広大な敷地の前に出た。奥まったところに勇壮

な木造建築が控えている。やや古色をおびたのがみろく殿。池をへだてた先の新しいのが、平成四年（一九九二）に完成した長生殿。こちらは檜と白壁の棟が無数に組み合わさっていて、「二〇世紀最大の木造建築」といわれている。

自然石と生け垣で囲った中に、実質的には二つの建物と池があるだけ。ふつうは受付に神官なり巫女姿の人が詰めていて、お札や絵馬を売ったり、由緒書を配ったりしているものだが、その種のものは何もなし。きれいに掃きよめられた境内に人影一つなく、山を背に巨大な木造建築が肅然と立っている。

一般に「大本教」とよばれるが、みずからは「教」と名のらず「大本」あるいは「皇道大本」といった。綾部の大工の妻 出口なおが夫を失い、洗うような赤貧のなかで神がかりとなり、多くの「お筆先」を書いたのに始まる。明治二十五年（一八九二）のこと。年号からもわかるとおり長生殿は大本発祥一〇〇年を記念してつくられた。

その後の大本の発展と受難は、天皇制大日本帝国の膨張と軍国化にかさなってくる。さらに出口王仁三郎という天才的な組織者、宗教思想家ともかかわっている。世直しを唱える庶民宗教の急激な拡大に国家権力はあ

たふたと怯え、まずは不敬罪で、つぎには治安維持法で弾圧した。いかに脅威を感じていたか、幹部と信者を検挙するだけではなく、本来は「証拠品」として保存すべき建物を徹底して破壊し、敷地を町に下げわたしたことからわかるのだ。検挙され、拷問にあったが誰ひとりとして転向せず、戦後の裁判がすべて無罪を言い渡した。

出口王仁三郎は本名上田喜三郎である。

京から老ノ坂をこえて丹波に入って最初の町亀岡の出身。出口なおの娘すみと結婚し、「お筆先」を解読して「世の立替え」、庶民救済の宗教教団にまとめるにあたり出口王仁三郎と改名した。それにしてもどうして「喜」を「王仁」に変えたのだろうか？ 残された書き物や裁判記録が伝えているが、深い洞察とユーモアをそなえた、スケールの大きな人物だった。都びとが「鬼の国」と恐れられた地にあつて、鬼神にひとしい力を念じ、ユーモアをこめて鬼を王仁となぞつたのだろうか？

権力側には、もっけの幸いというものだった。中心人物を奇怪な怪物に仕立て、大本を「邪教」と言い立てればいい。マスコミもまた、こぞつて警察の望むとおりの報道をした。いちどつくられたイメージは消えないもので、いまなお「大本教＝邪教」の先人観を

もつ人がいるかもしれない。

十五分ばかり歩いたところが北のゲンゼ・エリアである。工場群や社宅棟のほかゲンゼ記念館、ゲンゼ博物館、となり合った市立病院や市の保健福祉センターなども、その位置からして、もとはゲンゼの施設だったのであるまいか。

こちらは波多野鶴吉という、やはり天才的な組織者・産業思想家がいた。明治の先覚者で、軍事ではなく産業による立国を説いた前田正名（まきな）に深く共鳴して、当時の何鹿郡（いしかが）（現・綾部市）の養蚕家をつとめ、蚕糸業組合をつくった。近代的な会社に改組するにあたり、ひとしく株を持ち合う「郡ぐるみ」の経営を考えた。前田正名は国、県、郡、村が自立して、それぞれ独自の「是（ぜ）（方針）」を持つことを説いていた。郡ぐるみ＝郡是（ぐんぜ）であつて、ここにゲンゼが誕生した。

日本の町にあつて、おもえば二つとないケースである。明治から大正、昭和の戦前まで、丹波地方の小さな町の南と北で大いなる事業が進行していた。波多野鶴吉が何鹿郡蚕糸業組合長として活動を始めるのが明治二十九年（一八九六）のこと。同じころ、出口王仁三郎はお筆先の解読に没頭していた。

大正五年（一九一六）王仁三郎、信仰集団

「皇道大本」設立。

大正六年（一九一七）波多野鶴吉の郡是本社完成。

鶴吉は安くて丈夫なメリヤス肌着を基幹商品にして、「地域社会と共存共栄する理想の会社」をモットーにした。王仁三郎は「我よし（＝利己主義）」のはびこる世相を批判して、庶民救済を基盤にする地上天国的な理想社会を唱えた。一方はあたたかく肌をつつむ。他方はあたたかく心をつつむ。国家権力はメリヤスの肌着は歓迎したが、心の部門にかかわってくる国体や神に不穩の匂いを嗅ぎつけた。

戦後、大本は町から土地の返還を受け、「愛善苑」として再出発した。多才だった王仁三郎の伝統を受け、芸術、また世界連邦思想を教義に取り入れている。二月の大祭ともなると広大な敷地に人があふれる。

ゲンゼ記念館は「郡是」時代の過去を展示し、ゲンゼ博物館は主として現況を紹介している。それからわかるのだが、鶴吉側にもいくたびか苦難のときがあつた。一九二〇年代の世界不況、戦時には軍需産業への転換を強いられた。戦後の好景気のもと、打ちつづく繊維不況、アメリカの新製品ナイロン靴下の登場……。そのつど苦



グンゼ記念館

境を切り抜け、発展のバネにした。いまやグンゼは肌着だけでなく、世界的な総合アパレルメーカーであつて、技術を生かしてメデイカル分野、バイオ製品、プラスチック、電子製品、ハイテク事業にも進出している。会社概要（二〇一一年三月三十一日現在）によると、従業員は連結会社含めて八九八九名。売上高一兆三三七〇億円、営業利益

三〇億八五〇〇万円、そして「最初の一步」を明示するようにして掲げてある。「本店京都府綾部市青野町膳所一番地」。

気になっていた二つをまわり、宿題をすませたぐあいだ。南北をつなぐ通りは歩道がひろくつてあつて、愛称が「西町アイタウン」、その一番街に「ものづくり館」が置かれている。グンゼの創業精神である「人間尊重」「優

良品の提供」「共存共栄」が丹波の企業風土をつくってきたのだろう。先生に引率された高校生が熱心に見てまわっている。京セラやオムロンや三ツ星ベルトといったよく知られた会社にまじつて、アカツキ製作所、大槻ポンプ、国産部品工業、サント機工、堀内機械……どのブースも広告会社にまかせたりせず、いかにも手づくりの工夫がこらしてあつて、門外漢にもよくわかる。

「手に取ってみてください」

ネジ見本の一つだが、拡大鏡が添えてあるのは、肉眼だと黒いチリとまちがうからだ。拡大すると、たしかにネジで、きちんとラセン式のミズが走っている。いうまでもないことながら機械はすべてネジでとめて出来ており、〇・〇一ミリ単位のネジは人体の血液にもひとしい。世間的には無名でも特殊技術をもっている企業が綾部に揃っている。高校生にまじっていたいた資料の一つは語りかけていた。「これからは大都会の散流企業であくせくするより、ふるさとの優良企業にＵ・Ｉターンをしてサクセス人生をゲットする時代ですよ」。

Ｕ・Ｉターンとは聞きなれないが、ＵターンにアイタウンのＩ、また「友愛」とダブらせてあるらしい。

綾部市は「昭和の合併」の際に旧城下町綾部町と六村が合併し、その後五村が加わったので市域が広い。志賀郷、物部、豊里、口上林など、いかにも由緒を伝える地名が多く、それぞれに歴史の証人役のような史蹟がのこされている。

「あやバス運行百万回」

市の援助する運行事業者は関西丸和ロジステイクスという。旧の村々と市街地を結ぶバスの運行回数が天文学的數字に及んだのは、一日に数本といった運行ではなく、生活に必要な便数をきちんと守っているからで、さらにおおかたの路線が先に市役所や病院や学校や郵便局を巡回する。だから行き先にあたふたせず、やってくるバスに乗りさえすれば、おおかた市中の用がたせる。小さな町の大きな知恵というものだ。

その一つの黒谷線に乗って北へ向かった。市街地を出ると、JR舞鶴線と国道27号が寄りそっていく。矢印つきの標識がつぎつぎと「京セラ」「日東精工」「綾部工業団地」を指している。グンゼ精神を受け継いだUターンズのホープたちだ。しだいに左右から山が迫ってくる。左手の山裾に安国寺といって、足利尊氏生誕の地とつたわる寺がある。バスの窓からチラリと見たただけだが、茅葺きと禪

宗風の白壁が印象的だ。室町時代の風雲児は都びとにとつては「西方の人」であり、そんな事情が王権篡奪者のイメージをよけいに強めたのかもしれない。

山ひとつ向こうが舞鶴市というどんづまり。国道から西の山あいには枝道がのび、溪流沿いの細い谷に入っていく。かつて全国のあちこちに「紙の里」「和紙の村」があった。

時代の流れのなかでおおかたが名のみ残るだけか、ほんの一軒がほそぼそと続いているといった状態になったなかで、綾部市黒谷は数少ない例外である。数十軒が黒谷和紙協同組合をつくり、いまなお色濃く「紙郷」の性格をとどめている。

西国の山深いところには「平家の落武者」伝説がつきものだが、黒谷でもよく似た話がつたわっている。平家ゆかりかどうかはともかくも、京にゆかりはあったにちがいない。丹波、丹後の山は良質の楮を産する。谷を刻むようにして黒谷川の清流が走っている。そして丹波街道は京の都への一筋道だ。原料があり、製作に欠かせないきれいな水に恵まれ、紙の大消費都市と結ばれている。そんな風土の特質に気づいた人たちが移り住み、紙漉き業を始めるかたわら、組合をつくって生産管理、販売を一元化させた。生

産を調整して品質を落とさない。個人では弱いのが、組合としてなら京の紙問屋と対等に交渉できる。黒谷産は文庫紙、洗札用紙、生漉楮紙、障子紙、襖紙を主力商品とした。いずれも京呉服店や寺社にはなくてはならぬものであつて、強くて質のいいものなら争って求められる。

明治以後、とりわけ第二次大戦後は洋紙の時代になり、和紙は急激に需要が少なくなった。技術の伝承もとだえがちで、産地の大半が手漉きから機械漉きへ転換した。そんななかで黒谷には聡明なリーダーがいたのだろう。伝統的な手漉きの技法を守ることによつて生産体制そのものを維持してきた。新しい商品は日々古くなっていくが、昔に変わらぬ産物は、その変わらなさによつて、つねに新しい。そしてクライアントを呉服商や寺社にとどめず、つねに販路をひろくこと。

郡是の波多野鶴吉や大本の出口王仁三郎に通じる「共存共栄」の考え方だろう。黒谷和紙協同組合の会館は販売所兼情報基地でもあつて、ショーウィンドウには色紙、便箋、はがき、名刺類のほかに、包装紙、紅型染紙、紙布座布団、絨毯、クッション、ハンドバッグなどが並んでいる。紙の絨毯やハンドバッグをいぶかしがる向きがあるかも



黒谷の集落

しれないが、「紙衣」<sup>かみこ</sup>「紙布」<sup>かみふ</sup>の言葉があるように、古くから紙は布の代理をしてきたのだ。Traditional Hand Making Paper of Kuroutani は、いまや世界的なトレードマークなのだ。

細い谷を黒谷川が奔<sup>せ</sup>っている。どこもかなりの傾斜地であって、石積みで平地をつくり、家や蔵をその上に建てた。道は川に沿っており、家ごとに横に長い三角の石垣がのびている。川の対岸には家ごとに橋がわたしてある。だから下から見上げると、左に黒っぽい三角、右に橋が棒状にたつらなつて森の一点で消えている。カーブをとりつつ、ずっと奥深く谷を縫って数キロにわたり、紙の里がつづいている。川を仕切ったところに白い大きな藻のようなかたまりが見えた。和紙の製作には、気が遠くなるほどさまざまな工程があり、川でさらすのは仕上がりに近いのだろう。西山に没む夕陽が射しかけて、水中の白がやわらかな朱色をおび、ゆらゆらとゆらめいて艶っぽい。おもわず見とれてみると、長靴をはいたおばさんがやってきて、グイと引き上げ、重そうにかかえていった。ごく散文的な風景が、紙の生まれるフシギさを、なおのこと印象深くつたえていた。

(いけうち おとぎ)



連載Ⅱ  
ホスピタリティーの  
手触り70

# 暮らすように旅する

## \*\*\*\*\* 長期滞在者向けに 食の魅力の提案を

近年、何度となくハワイのコンドミニウムに滞在している。それは、ハワイの魅力に改めて気づいた、というよりも、暮らすように旅する、という旅の形が気に入ってしまったからかもしれない。

ハワイでは最近、各地でファーマーズマーケットの開催が盛んである。生鮮食品ばかりでなく、テイクアウトできるスナックや飲み物の出店も多く、ホテルに泊まる一般の観光客にも人気という。もともと「道の駅」などで各地の産物を物色するのが好きだった私は、すっかりこれにはまってしまった。

昨年末、ハワイのノースショアに滞在した時に行ったのは、オーガニックやエコにこだわったハレイワ・ファーマーズ・マーケット

である。滞在している場所から近いから選んだにすぎないのだが、女性誌の取材に來ている知人に会って驚いた。オーガニック食材の多いハレイワは、数あるハワイのファーマーズマーケットの中でも、こだわりのあるマーケットだったらしい。

私は、トマト専門店のトマトとアボカド専門店のアボカドと、ドレッシング専門店のドレッシングと、蜂蜜専門店の蜂蜜と、ほかにも野菜やらパンやら山ほど買い込んで一週間の食料にした。

コンドミニウムに泊まる旅をするようになって気づいたことだが、ハワイには、とびきりおいしいトマトとタマネギがある。ハワイ島のカムエラという所で取れるトマトとマウイオニオンである。これらの野菜を合わせて、ハワイメードのドレッシングをかける。思い出しただけでも、もう一度ハワイに行きたくなる。



取りたてのオーガニック野菜が並ぶハレイワのファーマーズマーケット

旅行作家

山口 由美

なる。

以来、私は、暮らすように旅することにア  
ンテナを張るようになった。ハワイでも最初





アボカド専門店のおじさん

は、清掃やベッドメーカーキングが毎日入る、ホテル並みのサービスのところを選んでいったのだが、やがて、あまり気にしなくなつた。ごみ出しだつて、ごみ捨て場の場所とルールを覚えてしまえば、どうということない。サービスにこだわらないと、価格や立地面で選択の幅が大いに広がるのだ。

ヨーロッパでも、こうした宿泊施設は、ホリデーアパートメントなどと呼ばれ一般的だ。欧米の長い休暇は、なるほど、こうした宿泊施設に支えられていることに改めて気づかされる。スイスのマウンテンリゾートもいいが、ベネチアも面白そうだ。大運河に面したアパートメントで、しばしの住民気分を味わう。ハワイでそうだったように、ホテルに泊まっていたのでは見えてこない、その土地の風土に出会えるに違いない。いつか機会があった

らと、情報収集をしている。

そうなる、日本でもこうした旅を探したくなる。一度検討したことがあるのがニセコのコンドミニウムだ。オーストラリア人スキーヤーに「発見」され、海外に日本のパウダースノーの魅力を知らしたニセコ。その背景には、オーストラリアの業者が運営するコンドミニウムの充実がある。

数年前までは、日本であるにもかかわらず英語の予約サイトしかなかったのだが、最近、日本人マーケットにも目を向け始めた。慣れていない日本人向けに、清掃や朝食のデリバリーなどのサービスも始まり、利用しやすくなっている。

さらに、最近、町家や古民家などを短期の「貸し家」として提供している宿泊施設も登場して、注目している。だが、行ってみようかと調べていて、ちょっとがっかりしたことがあった。それは、どの宿泊施設も簡単な食器や電子レンジなどの設備はあるものの、建物の保全のために「自炊禁止」となっていることだった。

朝食や夕食のケータリングがあるのはありがたいが、長期滞在には厳しいものがある。一方で、コンドミニウムやホリデーアパートメントによくある最低宿泊日数は設けられて

いない。つまり、一見、「暮らすように旅する」宿泊施設のようにでいて、長期滞在は想定されていないのだ。町家や古民家という、今までにないスタイルの宿でありながら、一泊、二泊を基本とする日本的な発想から抜け出せていない。

文化財になるほどの歴史的建造物でなくとも、その土地らしさの味わえる、長期滞在を前提とした価格設定の宿があれば、もっと日本の旅のあり方も変わっていくのでは、と思う。日本人の現役世代は、確かに長期休暇が取りにくいかもしれないが、こうした宿泊施設に慣れた外国人観光客には、きっと人気が出るだろうし、時間の十分にあるリタイア世代にとつても、魅力的な宿泊施設になるだろう。田舎暮らしに憧れる人たちが、いくつかの土地で「お試し」的に暮らしてみる、そんな旅の形があつてもいい。

ハワイのトマトやタマネギではないけれど、日本の魅力のひとつとして、その土地ならではの質の高い食材がある。もちろん外食で日本料理を楽しむのでもいいけれど、「暮らすように旅する」宿泊施設が増えれば、日本の食の魅力を、より深いところで理解するきっかけにもなるのではないだろうか。

(やまぐち ゆみ)

## 「公益財団法人」への移行に伴う今後の事業展開について

公益財団法人日本交通公社 会長 志賀 典人

当財団は、本年三月十二日に創立百周年を迎えることができました。これもひとえに、関係各機関、各位のご支援と、当財団の先達の皆様のご力のたまものと感謝いたしております。

当財団は、一九二二年に外国人観光客の誘致を目指し「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」として設立され、多難な時期も乗り越え、日本における観光産業の発展とともに成長してまいりました。さらに、一九六三年十一月には、営業部門を株式会社日本交通公社（現在の（株）ジェイティービー）として分離し、観光産業の発展に資する調査研修事業などを中心とする公益的事業を推進してまいりました。

くしくも、百周年を迎えました本年三月に、内閣府より「公益財団法人」として認定され、四月一日に移行いたしました。当財団といたしましては、生い立ちである外国人観光客の誘致事業に始まり、営業部門の分離以降は研究調査事業が主体となるなど、百年の間に積み重ねてまいりました経験や知見が今日の公益的事業に活かされ、その公益性が評価され認定していただいたものと認識しております。今後の組織運営や事業推進にあたり、心引き締まるものがあります。

「公益財団法人日本交通公社」として行う公益的事業は、公益法人認定法で定める二十三項目のうち、次の五項目としています。

- 文化及び芸術の振興を目的とする事業
- 国土の利用、整備又は保全を目的とする事業
- 地域社会の健全な発展を目的とする事業
- 教育、スポーツ等を通じて国民の心身の健全な発達に寄与し、又は豊かな人間性を涵養することを目的とする事業
- 学術及び科学技術の振興を目的とする事業

これらの公益的事業を当財団の定款で定める「旅行及び観光の健全な発達と観光関係事業の向上発展に関する事業を行い、我が国の観光文化の振興に寄与する」という目的に沿って、有機的かつ複合的な事業展開を行っていく所存です。観光資源は、自然や人間が長い時間をかけて創り出した、現代のお金や技術で簡単に作り出すことができない文字通り「光」です。この観光資源とそれぞれの地域のありようや生活のスタイル等も含めた「観光文化」は、「固有性」や「独自性」があり、他に「代替」が利かないものです。それゆえ、その振興により、人々の心と生活、地域を豊かなものにしていくことが必要だと当財団

は考え、研究調査等を通じて、まさにこの「観光文化」の発展・継承に貢献していくことを目指しています。

これを実現するために、当財団は、「観光立国の推進」「地域の活性化」等に関わる自主研究等の自主事業を行うとともに、これまでの知見を生かし、国および地域の観光振興に寄与する公益性の高い受託事業についても積極的に取り組んでいく所存です。特に、東日本大震災および原発事故からの観光復興支援につきましては、継続的に実施していきたいと考えております。

また、これらの活動で得られた知見、実践事例、データ分析や考察、研究成果等について、積極的に情報公開を行うとともに、外部の研究機関、大学および関連学会等の情報を集約・整理する役割を果たせるような仕組みづくりを検討していきたく考えております。当財団の機関誌『観光文化』についても、当財団の活動とリンクさせ、より一層充実した内容にするためのリニューアルを検討しております。どうぞご期待ください。

当財団は今後も、全役職員を挙げて、日本の観光文化の振興・発展に向けて、社会的に有用性のある研究活動や事業展開に邁進し、社会に貢献していきたいと考えております。引き続き、読者の皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

（しが のりひと）

旅行年報 2011 最新刊

直近年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料を基に分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を望める。冊。二〇一二年九月発行。

旅行者動向 2011 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析。グラフや図表を多用して分かりやすく解説。冊。二〇一二年十一月発行。

心が動く、ヒットの方程式に学ぶソーシャルメディアに声を聴く

当財団主催「第十六回海外旅行動向シンポジウム」採録集。昨年七月のシンポジウムでは、存在感が高まってきたソーシャルメディアの特性を学びながら、そこに見える消費者の心の動きとヒット現象について迫りました。これまでは「経験」や「勘」のマーケティングに頼らざるを得なかった「グッチョミ」や「街のうわさ」のテーマがプログラムやSNSなどソーシャルメディアの台頭により分析可能になっています。従来のアンケート調査ではなかなか見えなかった深層心理をブログから読み解く例など、観光分野に応用できるヒントを紹介しました。なおの採録集は、当財団ホームページ「出版刊行物」↓「シンポジウム採録集」のページでPDF公開しています。ダウンロードしてご利用ください。二〇一二年十一月発行。

観光実践講座講義録 最新刊 つながる、が生む地域の新しい魅力

高校生に実演したのち多気町に学ぶ、毎年十月に実施している三日間の講座講義録。二十三年度は初めて東京を離れて三重県多気町で開催しました。同町では、住民、企業、学校、行政が一体となった取り組みが新たな観光的交流を生んでおり、その現場での体感や共感が実践力になると考えられます。地元講師は、多気町まわりの宝創造特命監・岸川政之氏、県立相可高校教諭・村林新吾氏、農材料理まめや代表取締役・北川静子氏ほか。ゲスト講師は夕日観光カリスマ・若松進氏、また、六月開催の基礎講座より境港市観光協会会長・栞田知身氏の基調講演も収録しています。二〇一二年二月発行。 ※当財団出版物の「注文はホームページからお願いします。担当：公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・5255・6076 http://www.jtb.or.jp



次号予告

陸続きになったことのない海洋島である小笠原の島々の自然や文化等には、一体どんな魅力があるのでしょうか。その魅力をどう継承していきけるのでしょうか。次号特集は、小笠原の島々を愛する、自然、文化、観光などの研究者や来島者、行政者として島民の方々、魅力と観光、ツーリズムの在り方について展望していただきます。

研究調査だより

● 観光庁の「訪日外国人消費動向調査のお手伝い」をして今年度三年目に入ります。この調査は、北は新千歳空港、南は那覇空港までの土の空海港で出国する外国人を対象に実施している調査です。年間三万六千人以上の外国人客を対象とする消費動向調査は世界的に見ても最大規模のもので、調査には、十言語に対応する調査票を搭載したiPadを用い、調査員が聞き取りながら入力していく方式を採用しています。

● 回収標本数や回答の精度を高めていく上で鍵を握るのが調査員の質です。幸い、この調査も回を重ねるなかでリピーター調査員の比率が高まってきており、昨秋の段階では七五%に上っています。また二人にはトリリンガル調査員となっており、渡航先が偏っている時間帯などには貴重なユティリティプレイヤーとして力を発揮してくれています。

● 現場で調査員の質を高める仕組みとしては、回収票のチェック、課題の見つけた調査員への直接指導、朝のインストラクションでの課題の共有などを徹底しています。また、調査員の問題意識などを自由に語ってもらう場をつくることも大切と考えています。昨冬には、調査員に声掛けをしてグループインタビューの場を設けました。調査の改善に前向きな意見も多く寄せられ、われわれにとっても貴重な知見を得る機会となりました。(塩谷)

編集後記

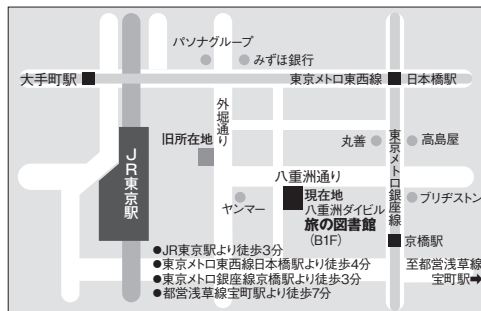
◆ 塔やタワーが観光、ツーリズム、地域文化等のなかでどのような意味をもつか。建立される時代や山辺都市など場所場によって異なるものと考えます。五重塔は宗教的な意味合いから、他に観光的な目的等から建てられ、壊れ、焼けたりしてきた。場における景観を形成し、人々の心に影響を与えてきた。東京タワーが建設された昭和の時を経て、平成時代に屹立する東京スカイツリー®と東京について角度を変えて考える機会を得た。完成前、直後、今後、東京スカイツリーをめぐるどんな観光文化が育まれていくのか見守っていきたい。(片桐)



旅の図書館 移転のお知らせ

公益財団法人日本交通公社は、観光文化の振興を願い、1978年10月から「旅の図書館」を運営しております。これまで図書館のありましたビルの建て替えに伴い、4月2日(月)より、下記に移転しました。皆さまのご利用をお待ちしております。

▶ 移転先：東京都中央区京橋1-1-1 八重洲ダイビルB1F  
TEL:03-3516-6100  
(東京駅八重洲地下街 2番通リ25番出口より直結)



開館時間：月曜日～金曜日 午前10時～午後5時30分 休館日：土曜日、日曜日、祝日、年末年始および棚卸期間(当館ホームページにてご案内)



## 観光文化 第213号

第36巻3号通巻第213号

発行日：2012年5月20日



発行所：公益財団法人 日本交通公社  
東京都千代田区大手町2-6-1  
朝日生命大手町ビル17F  
〒100-0004 ☎03-5255-6071  
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1  
朝日生命大手町ビル17F 観光文化事業部内  
〒100-0004 ☎03-5255-6090  
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載